ポストコロナの狩猟

―知・霊・境―

シンジルト（編）

熊本大学文学部社会人間学コース調査チーム（著）

2025 年3月31日

熊本大学文学部 シンジルト研究室

まえがき

シンジルト　SHINJILT

本報告書は、2024 年度「社会調査実習」という通年授業を履修した熊本大学文学部社会人間学コースの 3 年生によって書かれたものです。フィールドワークに強いこだわりをもつ文化人類学を専門とする私が担当教員となったこともあり、社会調査においては「なま」の人間と直接会うことを重要視してきました。様々な方々と出会い、時には共に行動し、そこで得られた経験を活かすことで、自らが生きる現代日本社会をその基層から理解していく、というのが本年度の社会調査実習の目標でした。この目標を達成すべく調査チームが着目したのは、狩猟でした。具体的には、コロナが終息した後（ポストコロナ）熊本県球磨郡地域における狩猟のありようを明らかにすることを目指しました。

実は狩猟をめぐって我々はこれまで 3 回調査を実施してきました（2014 年度、2017 年度、2021 年度）。その成果として、五木村での調査をベースに熊本南部地域における狩猟実践の全貌を浮き彫りにした『狩猟の民族誌：熊本南部における生業・社会・文化』（2015 年）、多良木町や湯前町での調査を中心に「狩猟肉」が地域社会にいかなるインパクトをもたらしているかを検証した『狩猟肉の民族誌：肉をつくる、肉がつなぐ、肉がつくる』（2018 年）、多良木町や水上村での調査を基に狩猟という実践がいかに猟師と野生動物との知恵比べや駆け引きの中で成り立ってきたかを考察した『人とけものを知るための 14 章：パースペクティブ・インターフェイス・イムポンダラビリア』（2022 年）という 3 冊の報告書を仕上げました。

最初の 2 回の調査は新型コロナウイルス感染症の発生以前に行われたものでしたが、3 回目は新型コロナがまだ完全に終息していない間に行われたものです。今回の調査は 4 回目であり、チームメンバーにとって先輩たちの達成された成果をいかに批判的に乗り越えられるかが課題でした。今回の調査チームは、既存の報告書を踏まえた上で、新型コロナ発生以前および流行期間中の状況との比較を念頭におきながら、ポストコロナにおいて人々はいかに狩猟を実践しているか、その現状を通時的に描くこととしました。狩猟関連の 4 冊目となる本報告書は 3 部構成となります。

なかなか言語化はできませんが、猟師たちが確かに持っている「何か」によって、狩猟という実践が技術的に可能になっています。その何かをここで仮に「知」だと表現するならば、その知はどのように生まれてきているのか。その知は変わりうるものなのか。その知は他者と共有しうるものなのか。こうした問題に強い関心を持っているのが、第 1 部「猟師たちの『知』――生成・変化・共有――」を執筆した調査班です。この班は、調査チーム内では「知班」と呼ばれています。

狩猟は技術だけで成り立つ実践ではありません。猟場のある山には霊気があり、山に入って猟をしようとする猟師たちは、入山する前に、必ず山の神のお許しを請う必要があるとされています。つまり、山の神に対して払うべき敬意は狩猟を支える前提となります。では今日において、山の神に代表されるような諸々の超自然的な存在はどのような性格の持ち主となっているのか。それらの存在に、人々は実際にどのように向き合っているのか。その向き合い方の変化と狩猟自体の在り方の変化とのあいだにどのような関係が見られるのか。

これらの疑問に対処しているのが、第 2 部「猟師たちの精神世界の変容――山の神の伝承を軸として――」を担当した「霊班」です。

狩猟は単なる趣味や伝統文化の領域にとどまらず、地域社会への実質的な貢献も大きく期待されるようになっています。ところが、何をすれば貢献になるのか。その実態は必ずしも明確に検証されているとは言えません。鳥獣被害を減らすため、猟師と役場は互いの立場の違いをいかに乗り越えて、協働しあっているのか。また、地域内部と外部との境界を横断していく狩猟肉が、いかに限界集落の再生に寄与しているのか。さらに、自然離れと認識されがちな若い世代の人たちがいかなる思いのもとで、上の世代から狩猟文化を受け継いでいこうと努めているのか。これらの課題に取り組んだのが、第 3 部「狩猟地域における境を越えたつながり――行政・民間・次世代――」を担当した「境班」です。

今回は 4 回目の調査となりますが、本調査に行く前と行ってからでは、チームメンバーの狩猟に対するイメージが変わりました。本調査が進むにつれて、当初立てていた問いは現場のリアリティとかけ離れていることに気づき、実際の状況に合わせて何らかのかたちで方向を転換した人も少なくありません。社会調査は仮説検証のための手段に過ぎないという考え方が覆されました。本調査を通して調査チームは社会調査の本来の目的を実感することができました。真の問題は調査研究者の頭の中から生まれるのではなく、実践の現場から発見されるものだということを学ぶことができました。

ところが、この実践の現場では、時折「失敗」も起こります。本調査の一環としてより重要視されていたのが、猟師たちとともに狩猟のプロセスを体験する「狩猟同行」です。猟師が獲物を確保し仕留めたまさにその瞬間を自らの目で確かめ写真に収めることが、学生たちにとって最もドキドキハラハラするタイミングなのです。しかしながら、今回の狩猟同行では、なぜかまったく獲物が獲れなかったのです。獲れなかったことには様々な理由はあったものの、猟師にとって同じ条件であっても結果的にどうしても獲れない時があるということを、チームメンバーは経験しました。その時、ある学生が「失敗も狩猟のうち」と落ち着いた口調で呟いていたのが、今も私の記憶に残っています。「狩猟肉」は好きな時に自由に選んで買えるスーパーの肉とは異なること、「狩猟」は偶然性を排除する工場畜産とは違う生業であるということを我々はこの「失敗」から学びました。

こうした学びの機会を我々に提供してくださったのは、熊本猟友会上球磨支部の猟師の方々です。ここ 10 数年、我々を無条件に受け入れてくださったのが上球磨支部事務局長の石田博文さんと上球磨支部支部長の長田和男さんのお二人でした。お二人を通して我々は多くの猟師たちと知り合うことができました。2024 年 1 月 2 日新年早々に事前調査のため、私が多良木町を訪れたときに対応してくださったのは事務局長の石田さんと猟師の和田清一さんでした。そして調査チームが現地に到着した初日に、猟友会は盛大な歓迎会を開催してくれました（写真 1）。新鮮なジビエ料理と美味しい地酒を満喫しているうちに、緊張気味だったチームメンバーたちと猟師たちとの距離が一気に縮まりました。

狩猟同行で我々調査チームをあさぎり町の険しい山々のなかを長時間案内してくださったのが猟師の伊津野幸一さんでした。狩猟同行だけではなく、伊津野さんは自ら日頃撮影された狩猟の対象となる様々な野生動物の写真と動画を調査チームに数多く共有してくださいました。また、限界集落の状況改善に積極的に取り組んでいる中村正廣さんは、ご自身が経営するハムソーセージ工房に我々をお招きくださり、ほぼ半日にわたってインタビューに丁寧に応じてくださいました。そして、調査チームにとって関心の高い「若者と狩猟の関

係」というテーマについて、現役の高校生とじっくり意見を交流する機会を、熊本県立南稜高等学校（以下、南稜高校）の中村友行先生に提供していただきました。南稜高校で開催された交流会では、狩猟免許を取得した 3 年生の井上夢来さんには、狩猟に関心を持ったきっかけなど自らの経験を踏まえながら、持続可能な地域創造に関して本格的なプレゼンテーションをしていただきました（写真 2）。

写真 1　上球磨猟友会が主催した歓迎会（多良木町、2025/09/17、ディリフ撮影）

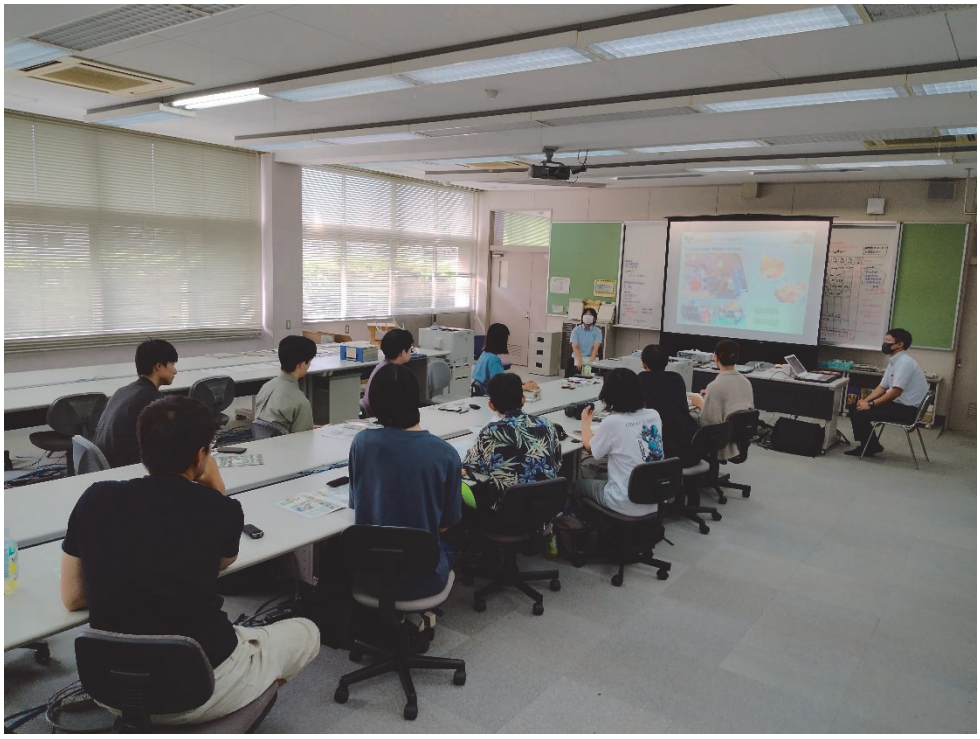

写真 2　南稜高校で開催された交流会（あさぎり町、2025/09/20、シンジルト撮影）。

全国で初めて野生鳥獣肉（狩猟肉）を扱った精肉店は多良木町に位置する村上精肉店です。そして村上精肉店は、全国で唯一の野生動物の競り市（猪成体市場）を持ち、今も毎年 11 月から翌年 3 月まで毎月の 5 日に定期的に競りを行っており、狩猟やジビエ業界で一目置かれる存在になっています。調査中、店長の村上武春さんは、我々のために座談会を開き、狩猟肉文化の現状について様々な側面から概説した上で、チームメンバーの細かい質問にも丁寧にお答えくださいました。またイノシシの解体も実演してくださり、チームメンバーに包丁が配られました。皆が包丁を握り、自らの手でイノシシを捌き、解体・精肉のプロセスを体験する機会をいただきました。調査の最終日、村上さんは熊本市に戻ろうとしていた調査チームを呼び止めて、作りたてのジビエ料理を差し入れてくださいました（写真 3）。

写真 3　村上さんからいただくジビエ（多良木町、2025/09/20、ディリフ撮影）

球磨郡から大学に戻ってきてから、調査チームは、現地の方々と密に連絡しながら、報告書の作成に取り組んできました。ほぼ半年間努力した結果、報告書全体の輪郭が出来上がりました。2025 年 2 月下旬、石田さんを通して調査にご協力いただいた方々に本報告書の草稿をご確認いただきました。確認期間が短かったにもかかわらず、方言や固有名称をはじめとする様々な側面から詳細な修正意見、適切なコメントを数多く寄せていただきました。

最後となりましたが、調査と報告書作成で終始お世話になった猟友会の皆さん、研修会を開いていただいた多良木町役場のスタッフの方々、美味しいジビエ料理を提供してくださった関係者の方々に心よりお礼申し上げたいと存じます。誠にありがとうございました。

2025 年 3 月 23 日

熊本大学・文学部・教授

目次

まえがき　（シンジルト）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

調査概要　（田邊晃大、大川凜子）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
音声データ表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
地図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

第１部　猟師たちの「知」――生成・変化・共有――・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
はじめに（加藤旭）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
第１章　猟師たちの専門的な判断はどのように実現されるか
――「暗黙知」理論を踏まえて――（竹村直紘）・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
第２章　験担ぎの減少は迷信の衰退か
――猟師たちの知の変化――（鬼塚八雲）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
第３章　猟師の「知識」は共有可能か
――ポランニー「暗黙知」の視座から――（加藤旭）・・・・・・・・・・・・・ 45

第２部　猟師たちの精神世界の変容――山の神の伝承を軸として――・・・・・・・・ 55
はじめに（垣迫亮太）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57
第４章　山の神は何者なのか
――それぞれの「神」を起点とした猟師の山に対する姿勢――（山田鼓梅）・・ 59
第５章　山の神に対する姿勢はどのように変化したか
――各人の語りに着目して――（垣迫亮太）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
第６章　銃から罠への移行は猟師たちの精神のあり方を変えたのか
――交換体系から考える――（岡田日々規）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85

第３部　狩猟地域における境を越えたつながり――行政・民間・次世代――・・・・・ 97
はじめに（冨阪直人）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 99
第７章　鳥獣被害対策は地域にコミュニティを形成するか
――役場と猟師、そして地域―（大川凜子）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 101
第８章　狩猟肉がいかに町おこしに寄与するのか
――ハムソーセージ工房ナカムラでの活動を中心に――（田邊晃大）・・・・・ 113
第９章　若者は「自然離れ」しているか
――南稜高校生の活動を中心に――（冨阪直人）・・・・・・・・・・・・・・・ 123

あとがき　（冨阪直人）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 135

調査エッセー　（鬼塚〈編〉）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 136